



切り絵 『朱色の舞』
比企善彦 作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072(622)2346

http://www.

ibarakijinja.or.jp/

「神事芸能」

記紀神話「天石戸隠れの段」で天鈿女命が天岩窟の前で舞ったのが「神楽」の始まりと言われています。神楽は、神事の中で大陸から伝わった楽器や歌や舞によって神慮を慰めるために行われていましたが、時がたつとともに次第に人心を癒やす饗宴での歌舞へと広がっていきます。その一方で、農耕の広がりとともに田の神に捧げる「田楽」といった農耕歌舞が形成され、広まっていきました。この「田楽」からは滑稽な所作が加わった「猿楽」が生まれ、さらに鎌倉時代には演劇化して、能・狂言そして歌舞伎へと展開していきました。このように神楽は永い時間とともに神事以外に娯楽化していきました。奈良時代、大陸からは上掲の絵のような面を付けた「舞楽」と呼ばれる音楽舞踊が伝わり神事に奉納されるようにもなります。

この舞楽は華やかさと荘厳さから今日でも宮中や主要な神社又は祝いの事の時等に催されていますが、古い形態の田楽・猿楽などは時代と共に庶民の興味が薄らぎ忘れ去られていきました。

今日、能や狂言、歌舞伎以外でこのような神事芸能に触れる機会はありませんが、年に一度十二月に斎行される春日大社「若宮おん祭り」で脈々と受け継がれたこれら神事芸能を観ることが出来ます。丸一日催されるこの祭事は、平安時代中期頃に朝廷ではなく藤原氏によって始められ、当時の神事芸能の全てをその道の第一人者によって演じられ、神に奉納されました。演舞者は神様にご覧戴くため日々継承した舞(踊り)を精進されていると言われます。若宮おん祭りは、諸々の神事芸能を通して平安時代の神祭りを観ているようで、千年以上の永い時を経て色褪せることのない神事芸能を毎年の神祭りによって継承されてきたことが実感できるのです。

『御本殿創建四百年
記念事業』について

今日、私達が一般に「本殿」と呼んでいる社殿は厳密には神様が
お鎮りになっている「本殿」と祝
詞奏上や神楽を奉納する「幣殿」そ
して参拝者が着座する「拝殿」の三
殿から成り立っています。

そして御神座の部分である当神
社「本殿」が創建されたのが元和
八年(一六二二)。それまでの本殿
には主祭神を天石門別大神として
素盞鳴命と春日大神の三神をお祀
りしていましたが、この年、新た
に本殿を創建して主祭神(中央)に
素盞鳴命を、左(東側)に春日大神、
右(西側)に八幡大神を配祀されま
した。そして天石門別大神をそれ
までの社殿とともに新たな本殿の
うしろ(北側)に奥宮として奉斎さ
れたのでした。

時が経ち明治十三年(一八八〇)
に現在の幣殿・拝殿が造営された
のです。幣殿の天井は豪華な破風
天井となっており、また拝殿には
夏祭に大神輿を据え置ける工夫が
されており、当時の氏子の氏神様
に寄せる気概と息が伝わってき
ます。この造営によって雨・風の

折りにも常に変わりなく祭祀が厳
肅に斎行されるようになりました。
このような経緯の中でも折々には
損傷部の修復や屋根の葺替え等が
氏子の力によって繰り返し行われ
てきました。

そして来る平成三十四年に「本
殿」創建四百年を迎えます。近年
では屋根の銅板も昭和四年に葺き
替えられてより、九十年が経ち雨
漏りが著しくなり、屋根の葺き替
えが急務となりました。また
参拝者の中には椅子を希望される
方が増えるとともに、現在の高床
の拝殿への昇降の不便さも目立っ
てきておりました。

そこで昨年二月「ご本殿創建四
百年記念事業委員会」が発足。今
日の課題への対応と、これまで受
け継いでこられた先人達に伝え、
次代に受け渡すべく「本殿」の改修
と「幣殿・拝殿」の造替を実施す
ることとなりました。

現在、基本設計を作成中ですが、
完了次第ご報告させていただきます。
す。



奉賛会だより

今年も去る四月十八日に、会員
約四十名参列の下、当社「祈年祭
(春祭)」に併せて恒例の「奉賛会厄
除安全祈願祭」が斎行されました。

その後は会場を参集殿に移し、総
会が行われました。総会では神宮
並びに皇居遥拝、国歌斉唱、敬神
生活の綱領唱和、会長挨拶、宮司
挨拶と続き、審議では会計決算、
予算・事業計画が承認されました。

総会の会長挨拶では「本殿創建
四百年記念事業」に触れ協力のお
話があり、続いて宮司より、当社
ご本殿は、来る平成三十四年(二
〇二二)に創建四百年という大き
な佳節を迎え、これを機に本殿の
修復及び屋根の葺替、幣殿・拝殿
の造替を計画しており、今後本格
的な実施に向けて、会員の皆様始
めより多くの方々のご理解とご協
力を賜るべくお願いがありました。

総会に続いては、国際日本文化
研究センター・京都大学人文科学
研究所共同研究員の豊田裕章先生
より、『茶の歴史―新たな観点か
らみた喫茶文化』というテーマで
講話をしていただきました。お茶
というものがいつ日本に伝えられ、

当初どのような飲まれ方をしてい
たのか、また歴史を経るに従って
どのように普及し変化したかなど
をお話しいただきました。「日常
茶飯事」という言葉に表されるよ
うに、今や私たちの生活に欠かせ
ない、限りなく身近なお茶ですが、
ここに至るまでには先人たちの様
々な工夫と試行錯誤があり、それ
が現在の喫茶文化につながってい
ることを学びました。皆様興味深
そうに、身を乗り出して聞き入っ
ておられました。

尚、当社奉賛会の現在の会員数
は四〇九名で、昨年度より八名増
加し、設立以来過去最多となりま
した。会員の皆様のお声げに感
謝いたします。



茨木音楽祭

若葉瑞々しい「立夏」の五月五日、雲一つ無い晴天のもと、「茨木音楽祭」が開催されました。初夏を感じる爽やかな風に乗って、市内各所でくり広げられる様々なアーティストの音楽が境内に響き渡り、終日心地よい雰囲気におまれました。「音楽を通じて、まちを元気にしよう!」という熱い志のもとに集った有志により始められた音楽祭、通称「いばおん」も初夏の風物詩としてすっかり定着し、今年で第十回目を迎えました。年を重ねるごとに益々企画が充実し、規模が拡大するとともに、音楽祭に訪れる人々も年々増えているように感じられます。今年には公募で選ばれたプロ・アマのミュージシャンが市内全十八会場で熱演をくり広げたほか、フリーマーケットやワークショップなども開催して子供達も楽しめる催しが実施されました。当社境内も「茨木神社ステージ」として、休憩所の前では個性的なアーティスト達が熱いパフォーマンスを展開し、多くの参加者を楽しませていました。



またダンボールハウジングと称する、段ボールで作った小さな家の子供達が似顔絵や動物など思い思いに絵を描いていくライブペイントも行われ、参加した子供達は楽しそうに筆を走らせていました。



今年のテーマでもある「サンキユー」ありがとうの気持ちをこれからも忘れる事無く、今後も愈々盛況に行われることを期待します。

鍼術書「鍼聞書」と 茨木元行

去る五月十二日に京都大学人文科学研究所科学史班と国文学研究資料館医学書班の合同研究会主催による「第一回日本鍼灸医術の形成」研究会が当社参集殿に於て開催されました。当社が研究会会場として選ばれたのは、室町時代中期の永禄十一年(一五六八)にそれまでの鍼治療を体系的に、更に諸症状を様々な「虫」に例えて纏めた「針聞書」が茨木元行という人物により書き表されてから、今年丁度四五〇年の年に当たること。また、著者である茨木元行がこの茨木村の住人であり、当地で書き記したことに因んで第一回目の研究会の開催地に茨木が選ばれたのでした。



当日は全国から約五十名の研究者が集まりそれぞれの発表と意見交換が行われました。

茨木元行による「針聞書」は一部の研究者には知られていましたが、その存在は不明で、丁度十六年前に森ノ宮医療大学大学院の長野教授が古書店で発見され、現在九州国立博物館に所蔵されています。同日、茨木市の鍼灸師が中心となり「鍼聖茨木元行顕彰会」が結成されました。ちなみに茨木元行の鍼灸術は「今新流」と呼ばれ、以後代々橋本家と北里家によって受け継がれ、明治の初めには日本細菌学の父と言われる北里柴三郎を輩出しています。若くして藩校で学ぶ中でドイツ人医師と出会い、西洋医学に触れ、病の諸症状を「虫」から西洋医学の「病名」へと探求の道を歩むこととなります。



神前結婚式

我が国における結婚式のルーツは神代に遡ります。伊邪那伎命・伊邪那美命の二柱の大神様が夫婦の契りを交わされて、天地万物をお生みになられたのがその始まりです。古来、結婚式は皇族や有力

武家を中心に行われてきましたが、現在のように社殿で行うのではなく、宮中の殿舎や武家屋敷で関係者に新郎新婦を披露するという形式でした。その後、庶民にも拡がるようになり、少くとも幕末から明治初期まではご神前においての結婚式ではなく、自宅に關係者を招いて夫婦固めの祝言を行っていました。現在のように神様の前で夫婦の契りを結ぶようになったのは明治以降のことです。とりわけ「神前結婚式」が広く世に知れ渡ったのは、明治三十三年（一九〇〇）の大正天皇と貞明皇后が宮中三殿に礼拝し、ご神前で夫婦の契りを結ばれた結婚の儀が斎行されてからで、このご成婚を機にご神前での結婚式が国民の間にも拡がって行きました。なお、仏式の結婚式も明治の頃に行われる

ようになり、さらに戦後、高度経済成長期にはキリスト教式の結婚式も流行しました。経済発展の著しい昭和四十年代にはご神前での結婚式がブームとなり、ホテルなどの商業施設にも式場が設けられ、結婚式は全盛期を迎えました。

しかし、その後は社会情勢や価値観の多様化などが相まって、次第に結婚式は簡素化していく一方、結婚適齢期を迎える世代の宗教観が希薄し、近年ではこれまでの宗教色を廃した人前式とよばれる結婚式も執り行われるようになりました。「神前結婚式」は平成に入っても減少傾向にありましたが、ここ最近では少しずつではあります。が、古式に則った我が国古来の「神前結婚式」が見直されてきています。神聖な鎮守の森の中で厳かに行われる神事、日常とは違う「ハレの日」に、神々にお見守り戴きたいという気持ちの表れではないのでしょうか。

「神前結婚式」は大神様の大前で夫婦の契りを交わし、ご加護を新しい生活の上に仰ぐ厳肅な神事です。中でも三三九度の盃を交わす風習は、本来「三献の儀」が原点

で、室町時代より武士の出陣や祝言の際の献杯の礼として重要な儀式とされてきました。古来奇数である三・五・七・九の奇数は縁起が良い数（陽数）とされ、三三九度は陽数の三を三回繰り返して、よりおめでたい数である九にすることで最上の数としました。さらに「夫婦固めの盃」・「親族固めの盃」もご神前にお供えした御神酒を共に戴くことで、両家が同じ身内となりその繁栄を神様に祈る意味がこめられています。このように神事には一つ一つに古来より伝わる深い意味があります。これからも先祖より受け継いできた文化・伝統を次代へ引き継いで行きたいものです。



これからの行事予定

◆大祓神事

六月三十日 午後二時齋行
人形祓・茅の輪くぐり

厄除神楽
茅の輪守・粽授与

◆夏祭り

七月十三日・宵宮

十四日・本宮

午前十時齋行

御輿渡御 神楽奉納

◆末社琴平神社例祭

九月十日

◆例大祭（秋祭）

十月十日 午前十時齋行

◆七五三詣

十一月中随時

折禱者にお守り

おみやげ授与

◆末社恵美須神社例祭

十一月二十日

◆天石門別神社記念祭

十一月二十二日

◆新嘗祭

十一月二十三日

◆大祓・除夜祭

十二月三十一日